

遊びきる子どもをめざして ～子どもが意欲的に遊ぶための保育者の配慮とは～

鳥取福祉会 津ノ井保育園 田中知歳

1. 問題提起

子どもにとっての「遊び」は成長の場であり、心身ともに発達していくと言われている。遊びの楽しさやおもしろさが深まっていき、十分に遊びきることで心地よい満足感や達成感を感じることができる。そして、時間を忘れて遊びに集中する中で、一人一人が自己発揮しながら友だちと十分に関わって「遊びきる」ことで自己充実感を味わうことができる。

しかし、子どもたちの姿を見たときに、遊びたい気持ちはあるのだが自分から関わりが持てず、遊びを楽しめていなかったり、保育者から促され指示を待ったりする姿がある。

また自分の思いや考えを出し合いながら遊びを進めていくことが少ない。子どもたちが「遊びきる」ためには、どのような保育を展開すればよいのか。保育者主導の保育になっていなかったか、子どもの発想や思いに寄り添った保育を進めていたか等、保育者側の視点に立った保育の振り返りを行わなければならない。

子ども自身が選んで遊べる環境を整え、子どもの発想を活かした保育を実践することで意欲的に遊びを楽しむことができるのではないかと思う。

子どもが遊びを通して経験した様々なことが、思考力や人間性などの基礎を育み、培われた心の育ちや意欲は、今後の子どもたちの生きる力となると考える。

そこで、今子どもたちに意欲や、考える力、人との関わりの力を育ていき、子どもたちが自ら遊びを選び、熱中して遊ぶための保育者の配慮について検証していきたい。

2. 目的

- 1) 一人一人が自己発揮し、仲間とともに遊びきる保育を目指す。
- 2) 子どもたちが意欲的に遊べるための保育者の配慮について探る。

3. 方法

- 1) 遊びきる子どもの姿とはどのように捉えるか確認する。
 - ・園内の職員間で共通理解する。遊びきる子どもの姿について意見を出し合い、日々の保育の中でこのような姿になっているか保育を見るポイントとする。

満足感、達成感を味わう姿・疑問に思ったことや解決できないことをやり遂げる姿
興味関心を持ちながら意欲的に遊ぶ姿・したい遊びを見つけ自分から遊ぼうとする姿
じっくり集中して遊ぶ姿・遊びの中で試したり工夫したりしながら遊ぶ姿
遊びを通して自分を表現する姿・友だちと関わって遊ぶ姿・場所道具を使いこなす等

2) 遊びの実践を振り返り、自分自身の保育の働きかけや環境の見直しを行う。

3) チェックリストによる保育者配慮の検証

遊びきる子どもの姿をもとに、保育者評価チェックリストを作成し項目に沿った保育者の配慮を検証する。

保育者評価チェックリスト

チェック項目
1、ねらいを意図した保育が進められているか
2、子どもの発想を取り上げ遊びにつなげているか
3、友だちとの関わりが持てるように関わっているか
4、安心して自己発揮できるように関わっているか
5、満足感達成感が味わえるような援助をしているか
6、興味関心が持てるような援助をしているか
7、疑問に思ったことを最後までやり遂げることができるように関わっているか（時間・仲間・空間）
8、選んで遊べる環境は整っているか
9、遊びの展開に合わせて環境を変えたか

2) 遊びの実践 3歳児（20名）

昨年度、実体験をもとに、友だちと一緒にすると楽しいと思えるような遊びを取り入れ、見守りや待つことを心がけ、保育者の配慮について考える。

3歳児 8月 事例 「色水遊びをしよう」

子どもと一緒にスライムや色水の準備をして興味は高まっていた。用具は十分用意してあったが、じょうごの数は限られていた。保育者が色水を20ペットボトルから500mlのものに分けるのを見ていて興味をもっていた子ども達。

そのうちYくんが「使っていい?」と言ってきた。少し難しいかなと思いながらも「どうぞ」と出す。20の大きなペットボトルにいれようとするためじょうごを持つとカップが倒れて、何度やってもうまく色水が入らない。

その時Kちゃんが急に、「持つといてあげようか。」と言ってカップを両手で持って押さえる。Yくんが「せーの!」と言いながら色水を流し込むと上手にコップに入れることができた。2人は顔を見合わせてにっこり。満足感いっぱいの顔である。「やったなあ。」「もう一回しようで!」とその後も2人で持つ入れるなどの役を替りながら遊びは続いて行った。



感触遊びを十分に楽しんできて、出来上がったゼリーのカップがたくさん地面に並びはじめた。子どもと相談しながら、盛り上がっていた泡遊びのそばに机を置きお店屋さんを作るとすぐにごちそうが並べられ保育者に「アイスだよ」などと楽しそうにイメージを伝えてくる。



そのうちに「泡にイチゴのジュースを混ぜたら、赤いクリームになった！」という子どもの発見に回りの子も集ってきて「ほんとだー。」と感心している。「おいしそうだね。」の保育者の言葉に、「またしてみよう」と言って嬉しそうである。保育者や周りの友だちに認められることでますます意欲が増してきた子ども達は、それから色水やスライムなどにも泡を混ぜてみるなど様々な探究遊びを満喫することができた。



<振り返り>

- ・用具は十分用意していたが、じょうごの数が足りなかったことから、友だちと貸し借りをしたり、ボールを持つ混ぜるなどの役割を持ったりして友だちと関わって一緒にしようとする事につながった。
- ・タイミングを見て、環境設定を変えたことで遊びが展開していった。
- ・触ったり試したりしながら子ども達は発見をし、それを受け止める保育者の言葉かけや友だちの「すごいな」の言葉でまた次の探究へと進んでいた。
- ・友だちのしていることを見て刺激を受け、真似をしようとする事でいろいろな事への興味が広がっていた。保育者は、子ども同士をつなげるような仲立ちをしなければならない。
- ・色水などは、今回だけでなく今までの経験から色の変化を知っていたが、まずはその経験を確認して、そのうえでさらに新しいことをやってみようとし、次の発見をする姿がみられていた。継続した遊びができるということも3歳児の遊びには必要である。

3歳児 12月 事例 「おうちごっこをしよう」

机にテーブルクロスを敷いて遊びが始まった。「ぎょうざ作ってる。」と小麦粉粘土で上手に皮を作るKちゃん。みごとな手さばきに、「おいしそうだね。家からもしてるの?」と聞くと「うん、お母さんの手伝いする。ありがとうっていうで。」と満面の笑顔で答えてくれた。保育者も一緒に餃子を作り、遊びを楽しんでいると「早くしないと保育園遅れるわよ。」と出来上がったごちそうをハンカチに包み始めた。大好きなお母さんになって、いつも言われている言



葉やしてくれることを模倣しているのだなと微笑ましい気持ちで見守る。

一人でおにぎりをたくさん作ってお弁当に入れたり出したりしているFちゃん。保育者が「おいしそうなお弁当一つください。」という嬉しそうにごちそうを次々に持ってきてくれる。近くの子も気が付いて「これもあげる！」と持ってきてくれ、「いらっしやいませ。」と2人のお弁当屋さんごっこが始まった。

一人でじっくり遊びを楽しめるように配慮しながらも、保育者が遊びをつなぐ気持ちを持つことの大切さを感じる。



真ん中にテーブルを出したが、次々にできるごちそうを手提げバックに詰めて出かけていくのは棚の下の狭い椅子置場である。数人の子ども達が集まり「パーティね」とごちそうを広げ始めた。保育者は、小さな机と仕切りをそこに移動する。なりきって遊んだり友だちとイメージを共有したりして遊ぶ楽しさを感じていた。

<振り返り>

- ・繰り返して遊ぶことで子ども達の「またしよう」「次はこれをしよう」という意欲につながる。目の前に飾られたごちそうがあることで遊びが継続した。ごっこ遊びだけでなく他の場面でも、遊びの続きができるような環境を整えておきたい。
- ・保育者に表情やしぐさで伝えてくる子もいるのでしっかり受け止め、友だちの遊びに関心がある場面ならば、友だちと関わりがもてるように仲立ちする。
- ・イメージを持ちやすいようにお家ごっこを設定した。自分がしてもらっていることの模倣をしながら、感情や言葉も模倣していた。園や生活の中で経験したことをごっこ遊びで再現したり、友だちとやりとりをしながら人間関係も広がりつつある。遊びの充実のために、日頃の生活の中の実体験や友だちと共通の体験を大切にしていきたい。

今年度、4歳児（26名）になった子ども達と話をし、発想を生かしながら、自分なりに熱中して工夫したり試したりできるような保育者の配慮について考える。

事例1 色水あそび「ジュースをつくろう ～試してみよう～」

ねらい いろいろな素材を使いながら自分なりに試してみようとする。
保育者の配慮・子どもからの発想を受け止めたり、言葉を待つように心がける。

シソの葉を選んで擦り始めると「梅干しのにおい」「ジュースができた」と今までの経験の再確認をしながら遊びを楽しんでいく。どんどんすり鉢で擦っていくと、葉っぱがどろどろ

になり匂いも強くなる。一人の子が「擦ってから水を入れると色がよくでる」と言い、色の濃さを考えて水の量や葉っぱの数を変えている。小さなすり鉢で葉っぱを擦っていた子が、ようやく順番が回ってきて大きなすり鉢を使い始めていた。濃い色をつくろうとしていたが、思ったより色は出ず、「小さいほうがいいや」と道具によって色の出方に違いがあることに気づいていた。

事例2 色水あそび「ジュースをつくろう ～友だちと一緒に～」

ねらい いろいろな素材を使いながら自分なりに試してみようとする。

保育者の配慮・子どもの発見を伝えながら、友だち同士をつなげるようにする。

保育者が、「こんな色がでたよ」「どうやってしたの？」などの言葉かけを意識してすることで、友だちの色の出方と比べ、刺激を受けたり真似をしながら遊びに没頭する姿がみられていた。

葉っぱの色がなかなかでない子もいたが、保育者は見守り気づきを待つように心がける。友だちの様子を見ていて手でもんでいることに気づき、自分なりにやってみながら、色を出そうとする子もいる。

「滑り台の下の草を使っていいか？」と子どもが言うてくる。色は出ないだろうと思ったが、「いいよ」と言うので自分で採ってきて、黙々と擦り始めた。そのうちに「先生、色がでない！」と大発見を保育者に伝えてくる。「僕もやってみる」と、それぞれに葉っぱを探して採ってきて確認をしていた。葉っぱを保育者が用意しておいたことは素材を限定したことになり、子どもの選択肢を狭めていたと気づく。

環境の再構成として、シソや花を植木鉢に植えたものや、好きな草を使えるように変更したことで子どもたちの興味は、広がっていった。



子どもが色水の色や濃さの違いに気づいて遊びを始めた頃、自分のものと友だちが作った物を比べ「こんな色が作りたい」としっかり擦られた濃い色水を持ってくる。目標ができることで、友だちが作ったペットボトルの色水と比べながら、水の量や葉っぱの数を変えて試していた。意欲につなげるためには、子どもが遊びの目標を持つことが有効である。今回は模倣できるものがあり分かりやすく試しやすかった。



水の量を調節できるようにと、バケツを用意しておいたが、すくうカップの大きさが大きすぎて調節がうまくいかない。「水を入れすぎると色がでない」と発見をする。一人の子が、いつも水遊びに使っている200mlのペットボトルを見つけてきて、「これにしよう。」と

使いだす。周りの子ども、それぞれにとってきて思い思いの水の量にして色の出方を試し、不思議さや面白さを感じていた。使用が予想される用具をふんだんに置いておくだけでなく、上手いかないときにどうしようかと考えること、保育者がすぐに答えを出してしまわないことも、子どもの探究心を増す大切な配慮であると感じる。

この夏、スライム泥などの感触、探究遊びを継続して楽しんできた。泡遊びでは、子ども達のソフトクリームを作りたいという言葉から、泡の硬さにこだわった遊びを展開してきた。

事例3 泡あそび「ソフトクリームづくり ～硬い泡を作ろう～」

ねらい いろいろな道具を使いながら、試したり工夫したりして遊ぶことを楽しむ。保育者の配慮・満足感や達成感を感じられるように見守ったり発見を共有できるようにする。

今までの経験から、早速自分で石鹸を削ったり、「泡立てネットの方が早いかな」「どうやったら泡ができるかな」と道具を選んで使ったりし、自分で試しながら泡作りを楽しむ。保育者は、子どもの気付きを待ち、「どうしたらいいのかな」などと投げかけ、考えられるようにする。そのうちに スポンジや泡だて器など使う道具によってできる泡の硬さが違うことに気付き、「これがほしい」「やってみたい」などの言葉も聞かれる。

それぞれの泡ができたころ、タライに柔らかい泡、硬い泡と分けて入れる。硬さの違いに驚きながら満足感を感じている。

さらに保育者が、硬い泡に魔法ののりを入れることでさらに泡は硬くなり、子ども達は不思議さに目を輝かせていた。

泡の硬さにこだわって「どうすれば硬くなるのかな」と言葉をかけていた。しかし子どもは、一生懸命泡だて器で泡を作ったあとで、葉っぱで作った色水を入れて柔らかい色つきの泡にして楽しんでいる。

大人のソフトクリームのイメージはふわふわの渦巻きのようなものだが、子どもはそれだけでなく、少し硬いアイスクリームのようなものまでさまざまであることに気づかされる。泡の硬さにばかりこだわっていたのは、保育者で子どもの発想はもっと自由で豊かであると感じる。

タイミングを見て保育者が遊びの展開を図っていくことで遊びが充実していった。遊びの中で待ちながら子どもの主体性を引き出すこと、保育者の経験させたいことをバランスよく取り入れることが必要である。

園内の研修で意見交換をしたところ、一人ひとりの泡を大きな一つのタライにいれて、みんなの泡にしていたが、4歳児の子どもにとって、自分だけの泡は特別で、それぞれの硬さ、色でいいのではないかという意見が出た。



事例4 泡あそび「ソフトクリームプレゼント ～すてきに飾ろう～」

日々の保育の場面で親しんでいた絵本のネズミに、「葉っぱで飾り付けたソフトクリームをプレゼントしたい」という子どもの言葉から遊びが始まった。

ねらい 自分なりの目的を持って作ったり飾ったりする。
保育者の配慮 ・ 試行錯誤を見守りながら達成感を味わえるように関わる。

泡に色水を入れて泡ジュースを作る子もいたが、色が混ざったり消えたりすることに気づき、初めに色水を入れてみたり、量を加減しながら入れるなど試しながら遊んでいた。

また、泡の上に葉っぱを載せると下に落ちてしまう。下に落ちないように泡を多くしたり色水を入れて混ぜてみたりするなど、それぞれに試行錯誤しながら遊びが深まった。



できたアイスクリームを置いておき、保護者にも遊びの様子を伝えていった。

保護者の連絡ノートより

「泡あわになって楽しかったと喜んでいました。ネズミさんにプレゼントを作るとお手紙がくると教えてくれました。家のお風呂でも泡遊びをたのしんでいます。明日もする！といまからわくわくしています。」などの言葉もいただく。

3) 保育者評価チェックリスト

実践ごとの保育者評価の一覧

事例1ジュースをつくろう ～試してみよう～
 事例2ジュースをつくろう ～友だちと一緒に～
 事例3ソフトクリームつくろう ～硬い泡を作ろう～
 事例4ソフトクリームのプレゼント ～すてきに飾ろう～

項目	事例 1	事例 2	事例 3	事例 4
1、ねらいを意図とした保育が進められているか	✓	✓	✓	✓
2、子どもの発想を取り上げ遊びにつなげているか		✓		✓
3、友だちとの関わりが持てるように関わっているか		✓	✓	✓
4、安心して自己発揮できるように関わっているか	✓		✓	✓
5、満足感達成感が味わえるような援助をしているか				✓
6、興味関心が持てるような援助をしているか	✓	✓	✓	✓
7、疑問に思ったことを最後までやり遂げることができるように関わっているか（時間・仲間・空間）			✓	✓
8、選んで遊べる環境は整っているか	✓	✓	✓	✓
9、遊びの展開に合わせて環境を変えたか			✓	

- ・事例1色水遊びでは、友だちとの関わりの項目が達成されておらず、保育者の意図が遊びの内容に影響を与えていると課題が挙がってきて、2色水遊びでは、友だちとのつながりを意識した活動をしたことで、比べたり真似をしたりするなど課題が達成されてきている。
- ・事例3ソフトクリーム作りでは、満足感達成感が味わえることを配慮しながら、自分だけの泡を作り込めるようにしたことで次の遊びへ展開していった。

4. 成果・課題

【成果】

- ・「今日も明日も続きができる」という環境設定を工夫する意識を持つようになったことで、子どもの安心感や遊びに向かう意欲を引き出した。
- ・子どもの内面を読み取ろうとし、子どもの言葉や表現を待つようになった。
- ・遊びには自由度が高く可変性が有ることが大切で、保育環境や保育者の仕掛け、仲間の存在が必要であることが分かった。
- ・遊びの成果や結果にとらわれず、思うようにできなくても「不思議だな。」「試してみよう。」などのプロセスを重視した保育を心がけることができた。
- ・保育者評価チェックリストを活用することで、評価や課題につながり、保育者の意図的な働きかけを工夫することにつながった。

【課題】

- 子どもの発想を引き出しながら、遊びを展開していくための保育者の働きかけを今後も継続していく。
- 遊びの素材や教材研究など専門的な知識をもっと学んでいきたい。
- 自分の保育の実践を周りの保育者に共有することが十分にできていない。園内研修などを通して職員相互の学びを充実させ園全体の保育力の向上に努めていきたい。

(参考文献)

「環境構成の理論と実践」保育士の専門性について

2014年 高山静子

エイデル研究所

「遊びきる子ども」をめざして

鳥取県幼保小連携カリキュラム

鳥取県教育委員会